

—原著—

レストレイナーの使用状況による小児患者の歯科診療に対する適応性の変化

南部友貴¹⁾, 佐野富子²⁾, 田口 洋³⁾, 富沢美恵子⁴⁾¹⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻 (主任: 富沢美恵子教授)²⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻口腔健康科学講座 小児歯科学分野 (主任: 早崎治明教授)³⁾ 厚生労働省 北海道厚生局⁴⁾ 新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学講座 (主任: 富沢美恵子教授)Adaptation to dental treatment of pediatric patients with the use of
physical restraintsYuki Nanbu¹⁾, Tomiko Sano²⁾, Yo Taguchi³⁾, Mieko Tomizawa⁴⁾¹⁾ *Course For Oral Health and Welfare, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences (Chief: Prof. Mieko Tomizawa)*²⁾ *Division of Pediatric Dentistry, Department of Oral Health, Course for Oral Life Science, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences (Chief: Prof. Haruaki Hayasaki)*³⁾ *Hokkaido Regional Bureau of Health and Welfare, Ministry of Health, Labour and Welfare in Japan*⁴⁾ *Department of Health and Welfare, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences (Chief: Prof. Mieko Tomizawa)*

平成 22 年 10 月 18 日受付 10 月 20 日受理

Keywords: 小児患者 pediatric patients, 歯科適応 dental adaptability, 身体抑制 physical restraints, レストレイナー restrainer, 歯科診療 dental treatments

The Division of Pediatric Dentistry Niigata University Medical and Dental Hospital introduced a method utilizing restraints for the treatment of pediatric patients, with their parent's consent. Most of our pediatric patients adapt to dental treatment with the use of restraints and eventually graduate entirely from the use of this method in their dental treatment. In order to understand the general age when pediatric patients adjust to dental treatment without the use of restraints, we investigated 200 pediatric patients who visited our hospital more than 4 times during the 2-year period from January 2004 to December 2005 (age at initial visit ranged from 8 months to 5 years 11 months; mean age, 3 years). The results were as follows.

1. At the initial visit, the treatment of patients involving the use of restraints was 100% for infants, but this gradually reduced as patients became older, reaching 50% at age 4 years.

2. In addition, about 50% of 5-year-old patients did not require the use of restraints during dental treatment. This number was composed of patients who no longer required the use of restraints as well as those whose dental treatment had never involved the use of restraints

3. Most of the pediatric patients whose dental treatment had never involved the use of restraints visited the hospital for prevention. Patients whose dental treatment involved the use of restraints more than four times visited the hospital for dental caries, furthermore, their mean number of treated teeth was 7.5, a value which was higher than the other groups.

In conclusion, the average pediatric patient graduates from the use of restraints in their dental treatment between the age of 4 and 5 years. Moreover, the high utilization of restraints is deeply related with the quantity and periods of treatment.

抄録: 新潟大学医歯学総合病院小児歯科診療室では、低年齢児の診療導入に保護者の同意を得てレストレイナーを使用している。多くの患児は、治療に対する慣れや成長により次第にレストレイナーを使用せずに治療できるように適

応状態が変化していく。今回、レストレイナーを使用せずに診療できる時期の把握を目的として、平成16年1月から平成17年12月までの2年間に来院した6歳未満（初診時平均年齢3歳0か月）の患児200名（男児111名、女児89名）を対象にレストレイナー使用の実態調査を行い、以下の結論を得た。

1. 初診時の使用割合をみると、0歳では全員に使用していたが増齢とともに減少し、4歳で約半数であった。
2. レストレイナーが不要になった患児と初診時から不使用であった患児を合わせた割合が、5歳時には約半数となった。
3. レストレイナーを使用しなかった群では予防を主訴に来院している患児が多かった。一方、4回以上使用している群では齲蝕を主訴に来院している患児が多かったため、歯髄処置や修復処置の割合が高く、平均処置歯数も7.5本と他群に比べて多かった。

以上の結果から、患児が歯科診療の意味を理解し、レストレイナーを使用せずに治療を受け入れ始めるのは4歳から5歳頃であり、歯髄処置を必要とするような重度の齲蝕のために診療回数が多く必要であったことに加え、処置歯数が多い分、治療期間が長期化したことが、レストレイナーの使用回数が多くなった要因のひとつであると考えられた。

【緒 言】

新潟大学医歯学総合病院小児歯科診療室では、他の医療機関からの紹介患者が増加している¹⁾。本院が新潟県で唯一の特定機能病院であることから紹介内容は多岐にわたるとともに、治療が困難な小児や障害児・者が紹介されて来ることも多い。急性症状等がみられる場合には早急な処置が必要であるが、患児が歯科診療に不安を抱いているケースでは、その対応が困難な場合も少なくない。

日本小児歯科学会医療委員会の調査によると、低年齢児では診療導入に抑制が行われることが多いが²⁾、本院でも「歯科治療を安全に行うためのシートベルト」と説明し、保護者の同意の下に、ネット式のレストレイナーを使用している。多くの患児は、レストレイナーを使用して治療を続けるうちに、治療に対する慣れや成長により次第にレストレイナーを使用せずに治療できるように適応状態が変化していく。

本研究では、新潟大学医歯学総合病院小児歯科診療室におけるレストレイナー使用の実態調査を通して、レストレイナーを使用せずに診療できるようになる時期を把握することを目的とし、診療録からレストレイナーの使用回数や使用が必要でなくなった時期、それに関係する要因について調査・検討した。レストレイナーを使用せずに診療できる時期を理解しておくことで、患児が歯科診療を受け入れる心理的変化の時期を知ることができ、歯科治療時の対応に活かすことができると考える。

【対象・方法】

新潟大学医歯学総合病院小児歯科診療室に平成16年1月から平成17年12月までの2年間に来院した初診患者814名のうち、診療のために4回以上来院した初診時年齢0歳8か月から5歳11か月（初診時平均年齢3歳

0か月）までの患児200名（男児111名、女児89名）を対象とした。全身疾患を有する小児や障害児は除外した。診療録からレストレイナー使用の有無、レストレイナーの使用が不要になるまでの診療回数や、その際の年齢を追跡的に調査した。

対象とした患児200名のうち、初診時年齢3歳から5歳（初診時平均年齢4歳4か月）の患児133名（男児77名、女児56名）については初診時の主訴、受診4回目までの治療内容、浸潤麻酔使用の有無、初診時の主訴に対する平均処置歯数について調査し、これらをレストレイナーの使用回数によって3群（不使用群、1～3回使用群、4回以上使用群）に分けて比較・検討した（表1）。3群間の比較にはTukeyの多重比較検定を用いた。

表1 3～5歳児の群別内訳

レストレイナー 使用回数	対象者 (名)	男児	女児	平均年齢
不使用群	52	27	25	4歳6か月（3歳0 か月～5歳10か月）
1～3回使用群	25	14	11	4歳1か月（3歳0 か月～5歳9か月）
4回以上使用群	56	36	20	4歳0か月（3歳0 か月～5歳11か月）
計	133	77	56	4歳4か月（3歳0 か月～5歳11か月）

以上の実態調査より適応状態に変化がみられる年齢と思われる、平成22年7月～9月に受診した4～5歳のレストレイナーの使用を経験した23名を対象に、歯科恐怖に関するアンケート Dental Sub-scale of Children's Fear Survey Schedule（以下、CFSS-DS）を行い、同時に保護者に対してレストレイナー使用に関するアンケート調査も実施した。CFSS-DSの質問は15項目あり、項目ごとに5段階でスコア化している。得点が高いほど歯科に対する恐怖心が強いということを表し、最高で